
神々の御座す処

中谷蜜蜂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々の御座す処

【Nコード】

N0746V

【作者名】

中谷蜜蜂

【あらすじ】

「――神になれば、ですか？」 高校生活最後の初夏、雹^{ひょう}は或る日突然祖母から出生の秘密を聞かされる。そしてこれからは神の住むべき世界で暮らせ、とも。しかし、異世界・離宮^{りきゅう}は千数百年に及ぶ人と妖との戦争が激しさを増し、血で血を洗う悲劇を繰り返していた―― ※神、妖などの定義は一般的なものとなります※

登場人物一覧（前書き）

この作品は登場人物が多い（予定）上に名前の読み方が特殊なものが含まれる為、読んでいる途中で

困った時にはこちらをご活用下さい。性格や容姿については作中の表現をお楽しみ頂きたいので、あえて

読み方と性別のみ（あれば名字も）記載しています。※人物が増える都度、更新していきます※

登場人物一覧

◆あ行◆

該当なし

◆か行◆

火悦……………かや。男。

心重……………このえ。女。

◆さ行◆

司馬……………しば。男。

飛沫……………しぶき。男。

静……………せい。女。姓は永衛（ながえ）。

◆た行◆

該当なし

◆な行◆

該当なし

◆は行◆

花野……………はなの。女。姓は篠村（しのむら）。

氷如……………ひしく。男。

雹……………ひょう。男。姓は永衛（ながえ）。

紅葉……………べには。女。

炎波……………ほなみ。男。姓は菊宗（きくむね）。

◆ま行◆

水の宮……………みずのみや。男。

◆や行◆

該当なし

◆ら行◆

該当なし

◆わ行◆

該当なし

序章

美しい処だと思った。景色——だけならば。

小高い山の頂で、^{いただき}気が遠くなりそうな程に永い歳月を過ごした巨岩。^{いわ}

その厳然たる岩の上から眼前に広がる風景を眺め、彼はそう思った。静かに岩頭へ腰掛けると胡坐を掻いて右膝で頬杖を突き、広大な世界へ
と再度眼を向ける。

見渡す限りの、深い森。緑の濃淡が目映いグラデーションを作り、初夏の明るい日差しを受けて更に煌めきを放つ。点々と見える水場もまた、同じように光り輝く。鳶が、特有の甲高い啼き声を上げながら、より
上空へと舞い上がって行った。田舎で暮らした事の無い彼にとって
は、
そのどれもが新鮮なものである。

「————さま」

幼少の頃よりの従者が、彼の名を呼びながら近付いて来た。振り返ると

いつもと変わらぬ笑顔が、そこにあった。

「まだ先は長う御座います。そろそろ参りましょう」

無言で立ち上がり、衣服の埃を払う。祖母が仕立ててくれた見慣れぬ形の

着物は、着慣れぬ物でもあった。それでも、これが当たり前になるのだ、と

自身に言い聞かせ、従者に無垢な笑顔を向けると、

「行こうか」

そう穏やかに告げて、彼は岩から下りた。

そして、今見た光景を思い返す。

豊かな森の、樹々の根元。そこに無数に横たわる、嘗ては魂の依り代しろとなっていた筈の白い、モノ。此処ここは今まで生きてきた日本くにとは景色だけが

似た別世界なのだ、と――改めて実感した。

一章

遡る事、二週間前。家族が趣味で建てた自宅敷地内の道場で、彼はある女性と対座していた。

「――神になれ、ですか？」

確り^{しっか}とした、必要以上に確りとした人だと常日頃から思っていたのに、

この人も到頭^{とうとう}――等^{など}という事を思った瞬間、顎に向かって鉄拳が飛んで

来て、そして炸裂した。

「……ちよっ！！何するんですか、静さん！突然暴力に訴えるのは止めて下さいってば！！」

セイと呼ばれた華年^{かねん}過ぎ――と言っても見た目は精々四十前後――の、見目麗しき女性はその美しい顔を盛大に歪めると、彼の顔を両側から挟み込み、般若^{ぼんぱ}の如き形相で彼を恫喝する。

「そなた今、この婆^{ばば}が惚^ぼけたと思うたであろう？隠し立てせず、正直に申してみよ」

答えようにも、口を尖らせる程に強く顔を掴まれているのは音を発するの

やっつとで、言葉を紡ぐ事等、無理な話である。彼は静の手を何とか引き

剥がし、彼女の顔色^{うかが}を窺いながら弁解をした。

「そんな事、思ってますえんよ、只^{ただ}、静さんがあんまり突拍子も

無い事を仰るから――言ってみれば、僕が惚けてたんです」

上手い事を言ってやった、と彼が内心喜んでいると、今度は頭頂部に拳骨^{げんこつ}を食らった。鈍い痛みがじわり、と脳を巡る。それを堪えつつ、涙目になりながらも努めて笑顔を作り、彼は抗議する。

「だから！何で殴るんですか、止めて下さいって！」

「今のも今までのも、そなたの表情^{かお}が腹立たしいというのが最大の理由じゃ。」

――何故こんなにも傍若無人な人間^{ひと}が自分の祖母なのか。それこそ神様に教えて欲しいわ、と彼・永衛^{ながえ} 雹^{ひょう}はそう思った。

二章

「結論から申すと雹と炎波は正式な後継者、なのじゃ」

菊宗きくむね 炎波ほなみは抱えた膝に突っ伏すように俯いていたが、自分の名前が

出て来たところで顔を上げた。その瞳には溢れんばかりに沢山の涙が溜まっている。

先刻。静に呼び出されて道場にやって来た彼は久々に会えた事が余程

嬉しかったのか、彼女を見るなり「おばあちゃん！」と、満面の笑みで

駆け寄ると両手を広げて抱き付こうとした。しかし、その呼び名がこの世で

一番屈辱的な物だと思っている静に、強烈なリアットをお見舞いされて

しまった。その痛みとショックとで、炎波はこの上無く落ち込んでいるのだ。

じとっ、とした恨みがましい眼を静へと向ける。

「何じゃ、炎波、まだ怒っておるのか。そなたの呼び方がオカシイからであろうが」

「だって、おば：静ちゃんに久し振りに会えて嬉しいからつい出ちゃっただけなのに、あんなに痛い事しなくても：」

「よし、分かった。ならば、次から炎波を叱る時は痛みの無い方法を

選ぼう。そうじゃな…寝ているそなたの顔に水気を含ませた和紙をそつと置く――なんてのはどうじゃ？」

「うん！」

「――『うん！』！？炎波、そこは絶対、『うん』じゃない！…静さん、

炎波を殺すのは止めて下さい。」

炎波の隣でふたりの遣り取りを静観していた雹は、とんでもない展開に思わず割って入った。当の炎波は意味が全く分かって無いらしく、きょとんとしている。雹が溜め息交じりで静を見ると、意地悪な

祖母は純真そうな笑顔を見せていた。

「炎波からは許可をもらったからのう」

悪魔だ。雹はそう思った。

「許可があっても無くても、立派な殺人です。幼馴染を祖母に殺害されるなんて、僕は一体どれだけ不憫な加害者家族なんですか」

「安心致せ。目指すは完全犯罪じゃ。」

悪魔じゃなかった、魔王だった。雹は改めて、そう思った。

三章

外では雀が軽やかなお喋りを繰り広げている。その奥からは、境内で遊ぶ子どもたちの歓声も聴こえる。

「さて。戯れ言はこのくらいにしてそろそろ本題に入るかの」
「ええ、是非そうして下さい。」

静の瞳に鋭い光が宿ったのを見て一瞬身構えたが、今回は無事だった。

雹は安堵して、そっと胸を撫で下ろす。そして軽く片手を挙げ、今一番の

疑問を口にした。

「静さん、後継者と仰いますけど――うちの神社は既に姉さんが仕切って

ますし、炎波の家にしたって跡取りはお兄さんですよ？」

「馬鹿者。そなたはもう最初の話忘れてしまったのか？…炎波には

言うておらんのだが――そなたらふたりは、神の跡取りじゃ」

「ぼく、神さまになるの！？」

先程までの大人しさはどこへやら、炎波はすっかり元気になって、意味は

分かっていないだろうに大喜びをしている。

「神と言ってもですね…キリスト教、イスラーム、日本の神道における神

――それぞれで神の定義というものは異なる、と思うのですが」

「まあ、そうじゃな。強いて言えば神道に近いか――唯一神では

無い
からの。じゃからそなたらは同じ神の後継者候補のひとり、では無く、
別々の神の唯一の後継者、という訳じゃ」

：分かったような、分からないような。雹は元々、実家の神社は姉の所有物だと認識していたし、だからこそ自分は一般企業に就職して家計を助ける事が出来れば、と考えていた。それに加えて、神社の雑務を手伝う事はあっても神主として活動する事はまず無いので、正直日本の神道についても細かく理解をして
いる訳では無いのだ。

「どちらと言えば、精霊というものに近いかもしれぬな。雹は水の神、炎波は火の神の後継者な訳じゃが、例えば水の神は氷の精霊や雪の精霊、そう

いった者たちの頂点に御座す方じゃ。神々や精霊たちは自然物の数だけ

存在するのじゃが、中でも水の神や火の神は五皇神と呼ばれ――」

「ちょ、ちょっと待って下さい：頭が混乱してきました：」

突然そんな日常生活と掛け離れた、しかも物語の中でしか接しないような話を

矢継ぎ早にされても情報が脳内に残る筈も無い。彼の隣で何故か上機嫌な

炎波とは対照的に、静は片眉を吊り上げて雹を睨む。

「大事な話じゃから黙って良う聞け。そなたらの今後の生活には

至極重要な

事じゃ。これから神として生きていくからには――」

そこで彼女は、静は一瞬躊躇し、そして意を決して口を開いた。

「異世界で暮らしていくことになるのじゃから。」

四章

通された座敷は目を見張る程の広さだった。

――百畳はあるだろうか。建物の外壁と同じ乳白色の壁、柱や梁は全て朱色に統一され、恰も電の実家の神社を模しているかのようなたたずまいではあったが、その規模たるや比較に値にするものでは無い。呑気な炎波はうひょー、といった奇声を上げながら室内に入り、瞳を輝かせ辺りを見回している。一方電は、その雰囲気、そしてその奥に

居る人物の気配に圧倒されて足を踏み入れる事さえ出来ずにいた。

「…電さま？」

背後から聞き慣れた声がしたので、電は振り返り、軽く頷く。従者から

促されるようにして、彼は敷居を跨いだ。

「――ようこそ、我が神殿へ」

座敷の一番奥から、電の入室を待っていたかのように、その声は発せられた。それは囁くようなものであるにも拘らず、やけに鮮明だった。脳内に響く――不思議な声である。電はその場に跪き、その様子に気付いた炎波も彼に倣って膝を折る。ふたりの従者も彼らに続いた。

「お初にお目に掛かります。私は水の神子の電、彼は火の神子の

炎波と申します。水の宮さまから神子としての所作等をご指導頂きたく

参上致しました」

静から叩き込まれた挨拶を無事に言い終え安心した雹は息を吐き出しかけて、慌てて飲み込む。水の宮――即ち、水の神は肘掛に腕を預け雹の挨拶に聞き入っていたが、それが終わると穏やかな声音で、^{ねぎら} 労いの言葉を掛けた。

「皆、^{みな} 良う参った。そう畏^{かしこ}まらずとも良い。随分と遠い場所に着いて

しまったようだから、慣れぬ山道でさぞ疲れた事であろう。茶を持って

来させる故、近くに参れ」

「失礼致します」

雹がそう言うと、他の三人も彼と同様に、額が畳に着きそうな程に深々と頭を下げ、水の宮の許^{もと}へと歩み寄ると再度正座する。

その、水の宮の顔を見て、雹は哑然とした――静に聞いてはいたが、

彼の顔は本当に自分とそっくりだった。と言っても、水の宮は外見の年齢が三十代半ばくらいのもので、何もかもが同じ、という訳では

流石に無い。が、くつきりとした二重瞼^{まぶた}や見惚^{みど}れる程に長い睫毛^{まつげ}、そして

引き締まった口元。顔の造り自体は雹のものと大差は無い。只、決定的に

違うのは、雹が漆黒の短髪であるのに対し、水の宮の髪は透き通るような

見事な銀髪で、座っていると床に着く長さだという点である。

——長さはともかく、もしかして自分の髪もいつかあんな色になるの

だろうか、と突然電は軽い不安に襲われた。

「…いかがした？電。私の顔に何か付いておるか？」

余りに真剣に、しかも思い詰めた表情で電が見つめるので、水の宮は心配そうに彼の顔を覗き込む^{のぞ}。頭髮の心配をしていた、と正直には言えないので、電は容姿の話をする事にした。

「あ、いえ、祖母が私に、そなたは本当に水の宮さまに良う似ておる、

まるで生き写しじゃ、と申しておりましたので——」

そこに至って、ある事に気付く。電は拳を口元に当て、一瞬思いを巡らせる

と、心に浮かんだ疑問を口にする。

「…何故祖母は水の宮さまと私が似ている事を知っているのでしょうか。

確かに私は水の宮さまの複製^{クローン}のようなもののだとは聞きましたし、それなら

似ているのは当たり前でしょうが——あれは実際にお顔を拝見した事が

あるような口振りでした。おふたりはお会いになった事があるので
すか？」

「知っているも何も——」

そこで彼は、水の宮は優しく微笑み、そしてゆっくりと口を開いた。

「彼女は…静は、私の妻であるぞ？」

五章

「――静の個人的な事情もある故、詳しい事を私の口からは申せぬが、

彼女が十七の年に出逢ってな…全く、細かい事まできちんと伝えておけ

と、あれ程念を押しておったのに…」

話の半分は静への不満だったが、しかし水の宮の、その表情はとても慈愛に満ちた

ものであった。

「静さんとは…今も会ってらっしゃるんですか？」

「別々に暮らすようになって…もう四十五年か。その間、一度も会って

おらぬ。そのの、氷如ひしくを通じて文ふみの遣り取りはずっとしておるがの

――

いつもすまぬな、氷如」

雹の従者である彼に、水の宮は親しげな笑みを向ける。

「勿体もったい無きお言葉で御座います」

氷如は正座の姿勢のまま、床に手を付き、上半身を軽く倒して謝意を述べた。

彼の長めの髪がさらり、と肩から胸のほうへ落ちる。水の宮は、続いて炎波の

従者へ顔を向けた。

「それに火悦かやも――」

呼ばれた火悦は、猫のように光る金色こんじきの瞳で水の宮を見つめると、氷如と同じ

格好で頭を下げる。

「永じまきに渡り雹と炎波の守護、ご苦勞であった。今後も彼らの近きん

習として

ふたりの力となってやっておくれ」

「は、承知致しました。」

水如と火悦は再び礼をする。炎波は、普段ひとりで無駄に賑やかな火悦が神妙な

面持ちで居るのが不思議でならないらしく、彼の顔を頻りに覗き込もうとしている。

それが鬱陶しくて堪らない火悦は、水の宮から見えないように炎波に対してきちんと

座るようにジェスチャーで促すのだが、炎波はどこ吹く風で一向に言う事を聞く気配が

無い。火悦は小さく溜め息を吐く。その遣り取りを雹は微笑ましく眺めていたが、すぐに

我に返って話を戻した。

「静さんは元々この…離宮りきゆうという惑星ほしの人なのですか？」

「否、静は地球からこちらへ迷い込んで来たのだ。稀まれに”道”を

見つけて

しまう者がおつての——ん？」

突如、水の宮の顔色が変わる。穏やかな表情から一変して、身震いする程に険しい

ものへとなっていた。鋭い眼差しは、屋敷の正門の方角へと注がれている。

「——飛沫しづめ」

「はっ」

御簾みす越しに、水の宮の従者である男の声が響く。飛沫は雹たちをこの部屋へ案内して

くれた人物で、その際は彼の主あるじと同じ、温厚そうな印象を受けたが今の彼の声からは

緊迫した空気しか感じられない。

「何やら、表が騒がしいようにあるが…」

「ご心配をお掛けして申し訳御座いませぬ。少々、襲撃に遭っているようで

御座いますて——」

報告された内容はとんでもないものだった。しかし、水の宮は動揺する素振りも見せず、

雹^{およ}たちには凡そ意味の汲^くめない質問をした。

「今日は”どちら”か？」

六章

空気を切り裂くような音が雹たちの耳へ届いた直後。御簾越しの彼から発せられた声は、更に厳しいものへと変化していた。

「誰ぞ！！宮さまの御座所へ警護に参れ！」

その呼び声を聞き付けた者たちの響めきや足音で、屋外は俄かに騒然となる。外の

様子を窺う為に雹が立ち上がりかけると、

「雹さま、いけません！——おふたりとも、こちらへ」

と氷如に阻まれ、彼は炎波ともども御簾の反対側の壁際へと追い遣られてしまった。

氷如に続いて火悦が素早く御簾の側へと移動し、その隙間から屋敷の庭へ視線を

走らせる——そこには何本もの火矢が、塀の外から次々に射込まれていた。

「樹が……っ！」

庭に面した廊下に迷い出て来た女官が口元に両手を当てて、悲鳴と共に声を上げた。

見れば所々に植えられた樹木に、火が燃え移っている。

その言葉を聞き、それまで事の成り行きを座敷内で冷静に聞いていた水の宮は、険しい

表情はそのままに、御簾を左手で大きく払い除けると廊下へと歩み

出た。雹と炎波は慌てて

彼の後を追う。

「――宮さま！ここは危のう御座います、どうか室内へお入り下さい！」

飛沫は主の行動に驚いて諫めるように懇願したが、その相手から掌でそれを制され

退いた。屋敷の主が、無言でその場に立ち、その両腕を広げて掌を空へ向けると、彼の

周りに無数の小さな光の輪が発生する。水の宮は暫く目を瞑り、ひとつ深呼吸をして、

そして、その手を静かに――――只、裏返した。

すると――雲ひとつ無い青空から突如として大粒の雨が降り始め：やがて、本降りに

なった。見る見る内に矢の火や樹木の炎は鎮圧されていき、塀の向こうからは不満気な

怒号が飛び交う。しかし、それも束の間。火に依るものは諦めた”彼ら”だったが、雨の中

でも矢を射る事は止めず、激しい攻撃は猶も続いている。水の宮は眉根に皺を寄せる。

「止むを得まい――少し：凍らせるか」

そのひと言で、雹は己の過去を心の奥底から引き摺り出された気分になって、軽い眩暈を

覚えた――が、それは一瞬の事で、すぐに飛沫の潤み声で正気に返る。彼は必死の形相で、

水の宮を屋内に押し戻そうとしていた。

「なりませぬ：っ、お身体に、障ります！」

「ご無礼を承知の上で、私が―――お力添えさせていただきます。頂きます。

」

鈴の鳴るような美声が聴こえたかと思うと、ザワザワという雑音に聴覚を支配されていく。

そして、程無くして――電たちの周囲は、闇へと誘^{いざな}われた。

七章

紅い蝶がひらり、宙を舞う。

どこからとも無く現れ、朧気な光を放ちながらゆっくりと上昇して行き、やがて

目的地を見つけて静かに羽を休めた。それを合図とするかのように電たちの居る

庭では一斉に松明が焚かれる。目を凝らして確認すると、蝶の降り立った場所は、

少女の肩の上だった。少女は先程の声の主でもあった。地上の電たちに視線を

落とすと左手を顔の横まで挙げ、左右に小さく振って、にっこりと微笑む。

「こんにちはー、初めまして。自己紹介は後程！」彼ら」が諦めてくれたら

下りて行きますねー。」

その場に居る、ほぼ全ての者が一様に困惑の表情を浮かべている。

唯一、水の宮

だけが平静を取り戻していて、少女に向けて穏やかな顔を見せた。

「すまないね、”力”を使わせて」

「いいえ、お役に立てれば何よりです」

水の宮も恐らくは、彼女と初対面なのだろう。けれど彼女が何者であるか、その察しは

ついているようにある。電は少女の背後に目を遣る。

それは、塀向こうの樹木が陽射しを遮ってしまう位置まで高く、

蔦^{つた}のように長く伸び、
そして複雑に絡み合って形成された莊嚴^{そうげん}な”壁”——だった。一緒に伸びた草花が点々と彩りを添え、美術作品のようですらある。その、目にも鮮やかな防壁のただひとつの難点は、襲撃者の居る側の塀を全て隠す範囲で造られた為、”彼ら”と呼ばれる者たちの動向が一切分からない、という事だ。少女は”壁”に耳を寄せて静止する。

「んー…頑張り過ぎちゃったかな——紅^{べに}ちゃん、ちょっとお外、見て来てくれる？」

彼女はその言葉を、柔らかな笑みとともに自分の肩先へと送った。すると、それまで

大人しく少女に掴まっていた蝶は、まるで返事をするかのように羽を一度だけ光らせる

と、瞬く間に”壁”を越えて行き、すぐに戻って来た。少女の目の高さ付近で、それは

非常にゆったりとした速度へと変わり——

そして蝶は——女、になった。

八章

「花さまのご希望通り、諦めてお帰り遊ばしたようで御座いますわ」

蝶は、美しい女性だった。雹たちや少女の着物と同じ、忍者服に似た衣を纏い、ストレートの黒髪をボブの長さで真っ直ぐに切り揃えた髪型が印象的だ。口元の黒子が、彼女の色っぱさを更に強調している。女性は少女の前に跪くと、自信に満ちた笑顔で見て来たままを報告した。

「良かった、ありがとう」

少女が踵を廻らして”壁”に何かを囁くと、一瞬の内にそれは消滅した。続いて、庭の樹が徐に少女の足元へと伸びる。彼女はその枝に掴まると地上まで下降して、水の宮の正面に軽やかに着地する。すぐさま少女は肩膝立てで頭を下げた。

「水の宮さま、ご挨拶が遅れて申し訳ありません。また、お許しも得ずに」

出過ぎた真似を致しました事、お詫び申し上げます。」

「出過ぎた真似等、とんでもない——礼を申すぞ、木の神子殿」水の宮が目細めながらそう告げると、少女もまた嬉しそうに目を細くする。

「流石は水の宮さま。仰る通り、私は木の神子の花野と申します。この者は

いずれ私の従神じゆうしんとなる近習の紅葉べには。木の宮さまから、ご挨拶をして
おいで、

と言われ、お邪魔致しました」

「わざわざ、すまないね。丁度今日、うちの神子たちも到着した
ところだ。

是非仲良く――してやっておくれ。」

そこで水の宮は表情を引き締めて自らの従神に声を掛ける。

「――飛沫、被害状況の報告を！それと客人に茶の用意を致せ」
そう言うとき水の宮は居室へと戻って行った。庭に集まっていた屋敷
の者たちも自分の
持ち場へと引き返して行く。花野は雹と炎波に近寄り、彼らに向け
て手を差し出した。

「あらためて、初めまして。篠村 花野です。同じ神子として、
よろしくね！」

大きな目は少し垂れていて、彼女の優しい雰囲気により濃くしてい
る。薄い茶色の
瞳は陽の光で緑がかって見え、緩いウェーブの髪も色素が薄く、そ
の白い肌との
相性は抜群だ。桜色の着物も良く似合っている。

その小さな手を握り返して――――

雹は自分の胸が高鳴った事に、酷く驚いた。

九章

「――しくじった、だと？」

白髪の少年は報告に來た部下を、殺意さえ感じさせる眼差しで睨め付けた。

睨まれた部下は恐怖でひっ、という声を漏らす。少年の脇に座っている女が、

片方の口角を上げて、愉快そうに笑う。

「お止しよ、司馬。怯えてるじゃないか――あんた、ご苦労だったね。下がって良いよ」

部下の男は勢い良く頭を垂れると、大慌てで部屋から出て行った。

女は食べ

かけの李に再度口を付ける。司馬は先程と同じように、今度は女を見据え、

舌打ちをした。

「…要らぬ事を。心重、貴様いつから俺より偉くなった？」

「良い歳して、そうカッコしなさんな。長のおんたがそんなじや、

いずれ反乱が起きちまうよ」

心重は李の種を屑入れに投げ込むと、手近にあった布でその細い指に付いた

果汁を拭った。司馬は殊更険しい表情を作る。

「良い歳、は余計だ。まだ四十にもなってない。」

「四捨五入したら四十だろうよ。妾があんたくらいの歳の頃にはそりゃあ穏やかなもんだったよ。」

「嘘を吐け。色々と聞いているぞ――血を好む化け物、のようだっ

たつてな」

そこで心重はふふつ、と笑った。顔に掛かった長めの前髪を乱暴に掻き上げて、

彼女は不気味な笑顔を覗^{のぞ}かせる。

「失礼な話だね、好んじやいないよ。只^{ただ}この世が――人^{ヒト}が憎いだけだろうよ。」

司馬は至極冷めた眼で心重を見つめ、そして静かに、それを逸^そらした。

「――ふん。皆^{みな}、似たようなものだ：俺は神どものほうが余程忌々しいがな。」

初夏の爽やかな風が、室内を通り抜ける。空はどこまでも晴れ渡り、その中を雀^{たの}が数羽、愉^げし気に飛び去って行った。

「さっきの話だと――」

心重は机に伏して、己の髪を弄びながら口を開く。司馬がそれに続く。

「ああ――」木”の能力者だろうな。神が他^たの神殿に出向く事はまず無いから、恐らくは木の神子だろう。偵察隊の報告に依^よれば水と火の神子も”こちら”へ

来たようだし――神子が跡目を継ぐ前に、何とか神の一族を根絶やしにしたい

ところだが…」

「焦りは禁物だよ。それに、あんたには悪いけど…妾アヤカシも含めて妖
の連中は

神よりも人に恨みを持つ者が圧倒的に多い。対人ヒトの施策しやくを疎かにし
たら…

殺やられるのはあんた——だよ。」

既に伏すのを止め起き上がっていた心重は、真剣な顔で言い切った。
司馬は

彼女に一瞥いちべつくれると、無言で目を閉じる。それから大きく見開くと、

「お前に言われるまでも無い——神にも、人にも」

そう、力強い声で言った。そして————

「…我らが同胞の恨み、思い知らせてくれるわ。」と、言い放っ
た。

十章

「さっきのー」

「虫ー、むーしー！イーヤーー…」

氷如に疑問をぶつけようとした矢先、炎波の叫び声に邪魔されて雹は頭を抱えた。

「炎波、頼むからちよつと大人しくしてくれ…」

雹の自室として宛がわれた約二十畳の座敷で、炎波は先程から部屋の中をぐるぐると駆け回っている。理由は彼の、逆立てられた髪の先端に

しがみつく、一羽の蝶の存在だ。それは勿論紅葉の別の姿なのだが、昆虫全般が苦手な炎波にとっては関係の無い事実である。

彼が室内を三周半程走ったところで紅葉の怒りが頂点に達した。

32

どろん、という音が聞こえてきそうな勢いで彼女はヒトの形に戻る。

その拳は固く握り締められ、瞳にはうっすら涙が滲んでいる。

「虫、虫言う者が虫ですわ！！」

雹は飲んでいた茶を思わず噴き出しそうになったが、必死で堪えた。

紅葉の外見は氷如や火悦と同じで、二十代後半に見受けられるし、醸し

出す雰囲気もまた、大人の女性のそれとして相応しいものである。その

彼女が、今時小学生でも使わなさそうな科白せりふを声高に叫ぶとは、怒りの

度合いはかなりの大きさだ。雹は先に彼女の怒りを鎮めるべきと判断した。

「炎波、紅葉さんに謝んなさい。幾ら虫が苦手でも、蝶は紅葉さんの姿のひとつなんだから言葉には気を付けないと」

「はい…紅ちゃん、ごめんなさい…」

紅葉がヒト型になった事で炎波は冷静さを取り戻していて、雹の言葉に

従って素直に詫びた。十八にしては幼い言動の目立つ炎波だが、その純真さは彼の武器でもある。それに感化されて、紅葉も慌てて謝罪する。

「まあ！私わたくしこそ申し訳御座いません！つい取り乱してしまいましたわ…ご無礼をお許し下さいませ」

花野が、ふたりの遣り取りを見てくすくす、と笑い始めた。

「ごめんねえ、波なみちゃん。紅ちゃん、蝶の姿がコンプレックスらしくって…あ、氷如ちゃんと火悦ちゃんはどんなものに”変身”出来るの？」

花野の言葉に、雹と炎波は顔を見合わせた。そして従者ふたりへ同時に

目を遣る。すると氷如と火悦は不自然なまでに顔を逸らして、急に拳動が

怪しくなった。

「なあ——」

雹は努めて穏やかな表情で、静かに言葉を発した。

「ふたりも”変身”、出来る訳？」

十一章

てつきり、紅葉だけがそういう”体質”なのかと思っていたら、実は

そうでは無いらしい。かと言ってこの離宮の住人が全て彼らのように”変身”出来る訳でも無いという事なのだが、それよりも何よりも、今

までほぼ毎日一緒に過ごして来た者にそんな大きな秘密があった事のほうが余程衝撃的で、雹はがっくりと肩を落とした。その様子を見て、氷如が怖ず怖ずと声を掛ける。

「隠していて申し訳ありません：静さまのご要望だったのです。

おふたりには――雹さまと炎波さんには、せめて離宮に行く日までは、人間の子どもとして生活させたいと仰られて：」

「――静さん、の：？」

「はい。ですから姿を変えられる事も時が来るまでは言うな、と――」

氷如は言葉を選ぶようにして、そう告げた。

それを聞いて雹は、何だか余計に悲しい気持ちになった。

「何か：それでもやっぱりショックだな。俺たちが神子だって事、知っていいようにがいまいがいずれ離宮こくに来る事に変わりは無かった訳だろ？ だったら別に教えてくれてても：」

「それは違います。静さまはおふたりに、ご自分たちの事を”特別”だと思わずに、気負い無く生活して欲しかったんです。

学校に行って友達を作って、泣いて笑って、色々な事を経験あるじして欲しいと考えておられたんです――主の意向に沿わぬ

働きを致しました事につきましては、従者として許されるもの

では無いと承知しております。本当に申し訳御座いません：。」

氷如は雹に向けて、水の宮にしたのと同じように深々と頭を下げた。

「うちもねえ」

突然、花野が口を開いた。

「あ、うちはパパひとり子ひとりなんだけど——花も何年か前までは知らなかったの。偶々紅ちゃんたまたまがヒトに変わるところを

見ちゃったから隠せなくなってるね。その時にうちのパパも言っ

たよ。『エゴかもしれないけど、人間として生きる事でしか得られ

ない幸せを味わって欲しかったんだ』って：だからその、セイさん？

が隠してたのもきつと、”優しさ”だったんじゃないのかなあ」

そう言っただけはにっこり、と微笑んだ。理由が分かったところで急に

心の靄もやが晴れるというものでは無いが、けれども花野の言わんとする

真実ことは理解も出来、雹はその”優しさ”を有難く受け止める事にした。

「そうだな：篠村さん、ありがとう」

「いいえーあ、私の事は花で良いよー」

雹は女の子を名前で呼ぶのに慣れておらず気が引けるが、しかしこの異世界に居て名字で呼ぶというのも確かに妙な気がする。

「じ、じゃあ：花ちゃん。さて、話を戻すか。で、ふたりは何になれるのかな？——と言うか、俺の推理を披露しても良いだろうか」

「は？」

氷如と火悦が、同時に上擦うわすった声を出す。雹はそれを見てにやり、と笑った。

「ズバリ：どっちかが猫で、どっちかが鳥——だ。」

十二章

「見事に言い当てておいでですが…何故お分かりに？」
氷如が困惑気味に尋ねる。

「やっぱりなー、奇怪おかしいと思ってたんだ。まず猫！炎波
ん家の庭に出入りしてる、薄いグレーで蒼い瞳の猫。別に
餌やってる訳でも無いのに十年も出入りしてて、しかも
老いてってる気配も無い。あと、鳥！頻繁にうちの神社の
境内に来てて、その上やたらと目立つ真っ青な身体した
ヤツ。あんな鳥、他に見た事無いし——ああ良かった、
長年の謎がやっと解けたよ」
雹が大仰に胸を撫で下ろすと、氷如は口に拳を当てて苦笑した。

「なんだよ、お前、気付いてたんなら内緒にされてたくらい
でいちいち不貞腐ふてくされてんじゃねえよ。感じ悪いわりな」

火悦の物言いに驚いたのは紅葉である。幾ら雹が自らの主で無いと
はいえ、

相手は神子だ。

『神の一族には大恩がある————』

我が身を犠牲にしても彼らに仕え、その恩に報いよ。』

それが紅葉の一族、つまりは火悦や氷如とも共通する”種族”の、
鉄の

掟だった。無礼な口をきく等な、あるまじき行いである。だが、続く
言葉に、

紅葉は更に戦慄せんりつする事となる。

「なー、炎波っ、お前も言ってやれ。雹のバーカ、ってな」

「――っ、主に”お前”！？ 神子さまに”バカ”！？ ちよっと、

火悦さん！ お口が悪いにも程がありますわよ！！」

我慢出来ず、紅葉は火悦を叱責する。しかし当の火悦はどこ吹く風で、

しかも雹からにこやかに宥められてしまった。^{なだ}

「良いんだ、紅葉さん、こいつはいつもこんなだから――でも火悦。お前にバカ呼ばわりされる筋合いは無いぞ」

「そーだよ、火悦あ。雹ちゃんは賢いぞーこないだのテストも百点だったんだぞー」

炎波は雹の味方になって援護するが、その言葉に反応したのは雹のほう

だった。彼は呆れ顔で炎波に質問をする。

「炎波、こないだっていつの話だ」

「え？ 違うの？」

「ここ一年は満点は取ってないな……って、そういう話じゃなくて。また話が逸れたじゃないか。結局どっちが猫で、鳥なんだ？」

「私が鳥で、火悦さんが猫ですよ」

「そうなのか？ 瞳の色が全然違うから、火悦が鳥なのかなと思ってた」

猫の瞳は少し紫がかった、深い蒼色だった。

「瞳の色はあんま関係ねえな。氷如も今は褐色だけど、鳥になったら銀色になるぜ」

「ふーん……鳥の――氷如のほうはあんまりまじまじ見れなかったから、それは知らなかったな。――にしても知らない事だらけで正直もう疲れた……」

雹は座ったまま後方に両手を突いて、息を漏らした。

「心中、お察し致します。私は勿論、火悦も、分からない事にはいつでもお答え致しますから――今他にお気に掛かる事は御座いますか？」

「そうだな…さっきの襲撃者たちが何者なのかも気になるけど――その前に、この世界に居るのって、神以外には一体どんな”生き物”が居るんだ？」

静や、花野の”父親”が切望した、”人間”として生きる事――それは即ち、

”神”が人外の存在である事を強く裏付けている。更に氷如たちの”体質”を

考えると、彼らの他にも別の特徴を持った”生き物”が居るのでは無いかと

いう結論に、雹は達したのだ。

「そうですね…やや複雑なのでまずは簡単に説明させて頂きますが――この世界には大きく分けて、神・人・妖カミ ヒト アヤカシという、三つの種族が居ます。私や火悦さん、それから紅葉さんは妖の一種です。妖はこの離宮の先住民で、寿命は約二百年――」

「二百年!？」

これには雹と炎波、花野の三人が食い付いた。花野は雹たちよりはこの世界に

ついての知識を有しているようだが、それでも細かい事までは知らないようだ。

「はい――でも、これで驚いてはいけませんよ。お三方も、そして私たちも――」

氷如は切れ長の目を、更に糸のように細くして、

「二千年くらいは生きますから。」そう言って優しく、微笑んだ。

十三章

「二千年って――じゃあ、水の宮さまはいくつだ？
どう見たって三十代半ばじゃないか」

「宮さまはもう二千歳を越えていますよ。それに
火の宮さまも木の宮さまも――ですから雹さま方が
お生まれになったのです。」

寿命の年齢を越えている――”だから”自分たちは生まれたのだ。
雹は

ここへ来てまた、自身の存在する意味を実感した。

「妖はゆつくり老人へと変わっていきますが、神々や
稀ヒレヒレと呼ばれる私たちの種族の者はある程度の年齢

まで成長するとそこで時が止まったかのように、見た目
には年を取らなくなるんです。それで宮さまはあのように
お若くていらっしゃるんですよ」

それは幸せ、なんだろうか――氷如の話を聞きながら、ぼんやりと
そんな

事を想っていた。

「人は――静さまのように”道”を見つけて迷い込み、
そのまま住み着いた者も中には居ますが多くは、今から
凡およそ千三百年前に神々がこちらへ連れていらした地球の
人々の子孫、です」

「神が、連れて――来た？」

「ええ。以前神々は地球にお住まいでした。けれど、
地球は太古の昔より戦が多くて：そんな時に或ある神が
この離宮を見つけて、移り住む事を提案したのです。

ここは今でこそ人と妖の間で悲惨な戦争が起きています

が、元々はとても平和な惑星^{ほし}でした。妖は本来――
温厚な種族ですから」

「それなのに何故、今は戦争になっているの？」
疑問を口にしたのは花野だった。領地争いでも起きたのだろうか。

「アヤカシ、という呼び名はヒトが付けたものです。

意味は主に：妖怪、とかそんな感じですね。その呼び名からも分かるように人は妖を畏^{おそ}れ、崇^{あが}め、そして最終的には――見下した。妖が敵意を持たない事も一因だったのかもしれないね。神が人をこちらへ連れていらしたのにはある理由があったのですが、彼らはそれを勘違いしてしまった。『我々は”選ばれた”種族である』、と――人が妖を迫害する歴史の始まりでした」

紅葉が、氷如の言葉の後を継ぐ。

「それでも、千年以上は大きな戦争等^{など}は起きませんでしたのよ？ 永く、均衡状態を保っていたのですけれど――今から二十年前に或る事件が起こって、それ以来ずっと戦争が続いている状態なんですよ……」

皆の表情が一様に曇った。恐らくは花野や紅葉も雹が見たのと同じような、

惨劇の跡を目にしたに違いない。

「その、事件って……？」

「人側の王子が妖に――暗殺されてしまったのですわ」

十四章

「暗殺！？妖って温厚なんじゃないの？」

花野は酷く驚いて、口を開いた。紅葉が悲しそうに微笑む。

「それはもう、昔の話ですわ。妖は人の事も、神々の事も、恨んで憎んでいます。迫害や差別を受けて――家族や仲間を傷付けられて、そうして負の感情を抱いてしまう事は想像に――難くないですわね」

「そっかぁ…そうかもね…」

花野が目に見えて落ち込んでいるのに気が付いて、雹は話題を変える事にした。

「さっき或る神が、って言ってたけど、それは水の宮さまでは無いのか？」

「――ああ、移り住む事を決められた方ですか。それは違います。人を連れて来る事を決められたのは火の宮さまですが、水の宮さまはそのどちらにもあまり、乗り気では無かったらしくて…。移住を決められたのは光の宮さま――全ての神の頂点に御座す方です。」

と、氷如が答える。

「全ての神の頂点…静さんが言ってた五皇神の――いつきみのかみその上って事か？」

「そうですね。五皇神は二天神と称される、ふたあまのかみ風神・雷神と並んで、位としては第二位のお立場です」

また変な単語が出て来た、と雹は思ったが、毎度引っ掛かっていても無駄に疲労

するだけなので、黙って受け入れた。

「光の宮さまは最高位という事もあって、人々に大変敬われています。また、そのお人柄から神々にも一目置かれる存在です。故に他の神には認められない、特権をお持ちの方でもあります。その特権のひとつが――」

そこで氷如は、少し考えるようにして、それからまた言葉を紡いだ。

「妻”を持つ事が出来る――という点なんです。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0746v/>

神々の御座す処

2011年8月15日13時33分発行